

マクギリスが強くて草バエル

けろよん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもマクギリスが強かったら。最終決戦のIF小説。

目次

| | | |
|----|---|---|
| 3 | 2 | 1 |
| | | |
| 11 | 7 | 1 |

火星では今まさに最終決戦の火蓋が切って落とされようとしていた。

東の間の僅かばかりの停戦の時間が設けられたが、時間が来れば敵はすぐに攻めてくるはずだ。

のんびりとしている暇は無いのだが……

ギャラルホルンの大軍に包囲されている状況の中、マクギリスとオルガはまるでピクニックにでも行くような気軽さで基地から少し離れた自動販売機へジュースを買いに来ていた。

マクギリスがコインを入れてジュースの一本を投げてオルガに渡し、自分の分のもう一本を手にとって一口飲んだ。

「上手いな。火星のジュースも」

マクギリスの態度は実に堂々として落ち着いた物だ。それはいつものことなのだが、この状況にあってもそうだとは、さすがにオルガにも腑に落ちない。

「おい、こんなことをしている場合か。今がどういう状況か分かっているのか!？」

約束の時間が来れば敵はすぐにも攻めてくる。打てる手があるなら今のうちに全て打っておかないといけないのだ。

それなのにまるで呑気に無関係のような態度を取るマクギリスにオルガは苛立ちを見せる。

そんな彼にマクギリスはいつもの落ち着いた涼し気な大人の笑みを浮かべて見せる。

「分かっているとも。我々は包囲されているのだろうか?」

「だったら早く穴を掘って脱出して名前を書き替えにいかねえと!」

「そんなことをする必要がどこにあるのかね?」

マクギリスは缶を放り投げた。そして、銃を素早く抜いて撃った。

それは缶を狙ったのでは無い。缶の転がった先で数名のヒットマンが心臓を撃ち抜かれて倒れていた。

マクギリスはそれがまるで何でもないことのように落ち着いて銃

を戻した。

「やれやれ、どこにでもネズミというのは湧くものだな」

「まさか、あんたこいつらを誘い出すために自分達を囿に！」

「ああ、彼らはただのヒットマンではない。彼らほどの優秀な暗殺者を誘い出すにはこちらもそれ相応の餌を出す必要があったのだ。リーダー二人の命で後ろを気にせず決戦に臨めるのだ。分の悪い賭けではあるまい」

「さすがはマクギリス！ 頼りになるぜ！」

「では、行こうか。本番はこれからだ」

マクギリスは涼し気に、だがその瞳には力強い決意を称えて遠く戦場を見やった。

戦場を白い翼を広げて白いMSが疾駆していく。マクギリスの乗るガンダムバエルだ。

行く先には包囲をするギャラルホルンの部隊がいる。

何も時間が来るまで待つ必要などない。戦場が近づいてマクギリスは好戦的な笑みを浮かべ、バエルの二本の黄金剣を抜いた。

マクギリスの作戦はこうだった。

「バエル単体で特攻を仕掛けよう」

「大丈夫かよ。あんた一人で」

オルガを始め、鉄華団には動揺が広がっていた。

それはそうだろう。どう見ても勝ち目のない戦いに挑もうとしているのだから。

だが、マクギリスはそんな彼らを前に動揺の色一つ見せなかった。

「問題無い。お前達は穴でも掘っていればいい」

「そういうわけにもいかないだろー！」

バエル単体で特攻を仕掛けていくのを、オルガは白いユニコーンのようなMSに乗って見送った。

「オルガ、俺はどうすればいい？」

隣でいつものように三日月が訊ねてくる。

「そうだな。大将がああ言っているんだ。ここはしばらく様子見と行

「こうぜ」

向かっていくバエルにギャラルホルンの部隊はすっかりうろたえていた。

うろたえる部下にジュリエッタは激を飛ばした。

「うろたえるな！ 相手は逆賊マクギリスですよ！」

「でも、あの機体はバエルですよ！」

「たった一機で特攻を仕掛けるなど、何か策があるとしたか思えません！」

「そんな物、あるはずがありません！」

だが、マクギリスの行動はあまりにも不可解だ。鉄華団に動きが無いのも気になる。ジュリエッタが戦況を見極めようとしていると、隣で動く者がいた。

「ここは私自らが手本を示す時だな！ 皆の物続けー！ 逆賊マクギリスを討ち取るのだー！」

「おおー！」

「イオク様に続けー！」

我らがイオク様だ。彼の部下達も後に続いていく。

「あ、ちよ、イオク様？ あの馬鹿！」

ジュリエッタが止める間もありません。

向かってくるイオク隊に、マクギリスは全く減速せずただ黄金の双剣を向けた。

「イオク・クジャン。腐った旧体制の象徴だな」

一閃する。戦いにすらならなかった。

ただ王者がザコを一匹蹴散らした。その程度の気安さでイオク機は撃破された。

だが、続く者達に取って王者とはイオク様だ。

「よくもイオク様をー！」

「かかれー！」

「相手はたかが一機！」

「逆賊マクギリスを討ち取れー！」

「大義は我らにあり！」

「イオク様に勝利をー！」

「そして、それに従う者も罪深い」

マクギリスは彼らの戯言などに耳を貸さない。

ただ静かに双剣を構え、爆発するような勢いで踏み出した。

戦場を黄金の剣の煌めきとバーニアの光を撒き散らしながら白いMSが疾駆する。

誰もバエルの動きについていけなかった。

イオク隊はただやられるのを待っただけの哀れな彫像に過ぎなかった。

黄金の剣が最後の一機を撃破する。イオクの部下達はあっさりと全滅した。

その光景にみんなが息を呑む。

「あの野郎、あそこまで強かったのか」

「へえ、やるね」

「おのれ、イオク様はどうでもいいが、マクギリス・ファリド！」

ジュリエッタが悔しさに奥歯を噛んだ時、宇宙のラスタルから通信が入った。

「下がれ、ジュリエッタ」

「ラスタル様、まさかあれを使うのですか？」

訊くまでもなく、彼の厳しい眼差しは雄弁に語っていた。

「頼りのヒットマンもやられた今、もはや手を選んではいられない」

「分かりました」

戦場には屈辱しかないが、尊敬する上司の邪魔をするほどジュリエッタは愚かではない。

仕方なく部下達と一緒に後退した。広がった包囲の輪をマクギリスは戦場の中心で静かに一瞥する。

オルガには状況がどうなっているのかよく分からなかったが、敵が後退したのならチャンスだと捉えた。

「マクギリス、包囲を突破するなら今がチャンスじゃないのか？」

「いや、あのラスタル・エリオンはそんな甘さを見せる男ではない」

「上から何か来るよ」

三日月がいち早く気が付いた。のんびりとも言えるその口調にオルガも見上げ、その表情が凍り付いた。

上空から降り注ぐのは自分達を何度も苦しめた白銀の槍の雨。禁忌とも言われた殺戮兵器。

「ダインスレイブだ！ みんな離れろ！」

「うろたえる必要は無い！」

撤退しようとするオルガにマクギリスは叱咤とも受け取れる強い声を飛ばした。

「まさか何か策があるのか？」

「見せようじゃないか、ギヤラルホルンの祖アグニカ・カイエルの駆つたバエルの力。厄災戦を人類の勝利に導いた象徴と今なお語られる力をな！」

バエルは静かに跳んだ。そう見えたが、その勢いは力強く、一気に上空高く迫りくるダインスレイブへと肉迫した。

バエルはそこで静かに双剣を構え、マクギリスは地上に並ぶ者達を見下ろした。

「ギヤラルホルンの兵士達よ。忘れたのなら思い出させてやろう。これが誰も逆らう気など起こさせなかった、バエルの力だ！」

バエルの剣は迫り来たダインスレイブの一本を一刀両断に斬って捨てた。

普通なら在りえないことだ。禁忌とも言われたダインスレイブを、それも宇宙から超速度で降り注ぐ物体を、たかが剣一本で斬り捨てるなど。

だが、それを可能にするのがバエルなのだ。厄災戦を勝利に導いた機体なのだ。

バエルは次々とダインスレイブを撃破していく。過去にはバエルをたつた二本の剣しか武装の無い貧弱な機体だと嘲笑う者達がいた。だが、それは間違いだ。彼らは認識を改めることになる。

バエルにはこの二本の剣があればいいのだ。シンプルだからこそそこに全てを注ぎ込むことが出来る。だからこそバエルは剣の届く間合いでは無類の強さを発揮する。

その証拠にダインスレイブを全て撃破してもバエルの剣は刃こぼれ一つしていない。

ギャラルホルンの兵士達はかつての伝説の再来をただ口をぽかんと開けて見上げることしか出来なかった。

「チャンスだ！今のうちに突破するぞ！」

その隙を見逃すオルガでは無かった。鉄華団は進撃を開始する。

「迎え撃ちなさい！彼らを包囲の外に出してはいけません！」

ジュリエッタが命令しても完全に戦意を挫かれたギャラルホルンの兵士達が士気を取り戻すことは無かった。

「こんな時に馬鹿がいれば……」

悔やんでも失った物を戻すことは出来なかった。

数の差こそ圧倒的だったが、一点突破を目指す鉄華団に、ギャラルホルンはいかに逃亡を許すことになるのだった。

「これからどうする？」

宇宙へ向かうシャトルの中でオルガが訊ねる。鉄華団の全員とMS全機をも収納できるこの大型のシャトルはマクギリスが手配をしておいた物だ。彼の用意周到な準備の良さにオルガは舌を巻くしかなかった。

マクギリスはどこまでを計算しているのだろうか。彼の涼し気な横顔からは誰も想像することなど出来なかった。

彼は語る。これからの展望を。力強いリーダーとしての風格を
持つて。

「宇宙に出てラスタルを討つ。我らの勝利はアリアンロッド艦隊の壊滅を置いて他にない」

「でもよ。俺達は奴らから逃げてきたんだぜ。今の戦力で勝てると思うか？」

「フツ、まあ見ている」

とマクギリスが言うのでオルガは状況を見ていることにした。

シャトルが大気圏を超えて宇宙に出るとすでにダインスレイブを構えた敵の部隊が待ち構えていた。

喉元に武器を突きつけられている感覚にオルガは慌てるが、マクギリスの態度は落ち着いていたものだった。

「おい、どうするんだ？ やばいんじゃないか？」

「フツ」

「おい、マクギリ、うおっ」

戦場で突如として爆発の炎が上がってオルガは慌ててジャンプした。だが、撃たれたのは自分達では無かった。

「フツ、計算通りだな」

「何？」

オルガは外を見る。見覚えのある戦艦がダインスレイブ隊と交戦を開始していた。

通信が入る。モニターに現れたのは名瀬のスーツを着た懐かしいアジーの顔だった。

「加勢に来たよ、鉄華団」

ダインスレイブ隊と交戦を行っているのはタービンズの部隊だった。予期せぬ横からの攻撃にダインスレイブ隊は次々と落とされていく。

オルガは腑に落ちない物を感じていた。アジーに向かって訊ねる。「なぜだ？ 俺達はあるんだとは手を切ったのに。それに親父に迷惑を掛けちまうだろう」

親父とラスタルは裏で繋がっている。その関係はお互いに利益を得ようとしながらも、いつでも相手の弱みを握って優位に立とうと探りを入れ合っている。

この戦いへの介入が迷惑を掛けることは明らかだった。だが、アジーは問題無いと笑い飛ばす。

「私らがアリアンロッドと事を構えた。そんな事実が宇宙のどこに存在するって言うんだい？」

「え？」

戸惑うオルガに今度はマクギリスが補足する。

「ここにはマスコミが存在しない。ラスタルが禁忌を犯したことを知られることも無ければ、誰かが戦闘に介入したということもまた知られることはない。知らなければその事実は無いのと同じだ。ティワズもそんな情報は無いと突っぱねることだろう」

「さすがはマクギリス。相手の策を逆手に取ったのか。俺はあるが恐ろしいぜ！」

「だが、それも奴を逃がせば水泡に帰す。お互いに相手を殲滅するところが最善手なのは同じなのだ。あてにしているぞ、鉄華団」

マクギリスの読み通り、ラスタルはティワズにこの問題に干渉させることは選ばなかった。

余計な情報を相手に与える必要など無いしネズミが一匹増えただけの事で慌てる必要もまた無かった。

ラスタルは非情とも言える冷静さで状況を判断出来る男だった。ゴミが増えたのならそこも掃除すればいいだけのことだ。

だが、アリアンロッド艦隊の圧倒的な優勢だと思われた宇宙の戦闘だったが、その戦局は徐々に鉄華団が押しつけてきた。

「ガンダムか」

その目覚ましい活躍がラスタルの視界の前の宇宙でもチラチラとちらついている。中でもやはりバエルは目障りな存在だった。

「モビルスーツ隊を全機発進させる。宇宙ネズミどもを踏みつぶせ。ガエリオは何をやっている？」

「ガエリオ様ならもう出撃されました」

司令官の言葉に部下が答える。ラスタルはにんまりと微笑んだ。

「血気盛んなことだ。よほどライバルと雌雄を決したかったと見える」

ガエリオが出たのなら何の問題も無いだろう。ラスタルは落ち着いて闇の中の戦局を見定めることにした。

復讐に燃えるガエリオは強かった。その鬼神の如き強さはバエルとバルバトスを同時に相手にしても全く引けを取らなかった。

だが、キマリスヴィタールはオルガには全く執着を見せなかった。ガエリオは決着を焦りすぎたのだ。そこを見逃すマクギリスでは無かった。

キマリスヴィタールが面倒な邪魔者の排除に一瞬の隙を見せた瞬間に、バエルは接近して黄金の双剣を走らせた。バエルの高機動とマクギリスの腕があつたからこそ実現出来た素早い動き、圧倒的な剣の斬撃だった。

「おのれ、マクギリス！ このままでは終わらんぞ！」

キマリスヴィタールの残骸は宇宙の闇へと消えていった。戦いの終わりにマクギリスは小さく息を吐いた。

「君達がいてくれて助かったよ」

「オルガが上手くかき回してくれた」

「そうか。何か照れるな」

「後はラスタルを討つのみ！」

「あれを沈めればオルガの望みが叶うの？」

「ああ、俺達みんなの望みがな！ 行くぜ！」

三機のモビルスーツが向かう。

圧倒的な凶器が迫ってきていてもラスタルの不敵な笑みは崩れなかった。

「マクギリス、あの小僧がここまでやるとはな。この私に切り札を使わせるまでに成長するとはつくづく罪な男だ」

ほくそ笑む彼は宇宙の闇を見つめる。その深淵なる空間に白い翼を持つ巨大な影が姿を現し始めていた。

「待て！ あれは」

現れる不吉の影に直進するオルガはストップを掛けた。マクギリスと三日月も前進を止めた。

たった一体の敵なら特攻する道もあっただろう。だが、影は次々と現れる。

白い翼を広げたその巨大な姿を誰も忘れるはずがない。

現れたのはかつて三日月を苦しめたMAハシユマルだった。たった一機でも圧倒的な強さを見せつけた死の天使だった。その大軍勢だった。

宇宙空間にその美しくも異様の姿を現した1000機のハシユマル軍を前にさすがのオルガも絶句するしかなかった。マクギリスと三日月は静かに戦況を見つめている。

ラストルから通信が入った。

「驚いたかね？ 我々が量産したのはダインスレイブだけでは無かったのだよ」

「ラストル・エリオン。お前はどこまで禁忌に手を汚すつもりだ」

いつもは冷静なマクギリスも言葉に棘が出るのを隠せなかった。

明確な敵意をぶつけられても、ラストルは眉一つ動かさなかった。

「私は勝つための手段は選ばない。この世で最も罪なこととは何だと思う？」

「……………」

誰も言葉を返さない。この場で罪を犯していない人間などいない。ラストルは自慢げに話を続けた。

「それは敗北するということだ。敗北は多くの兵士達の犠牲を無意味とし、残された者達にも深い悲しみを与えてしまう。私は司令官として喜んでこの手を汚すこともしよう。だが、この私にも慈悲はある」

「何だ？」

「降伏したまえ」

「お前が私達を見逃すとは思えないが」

「それは当然だ。私は楽な死を選ばせてやろうと言っているのだ。誰も苦しみたくはないだろう?」

その大胆な提案にマクギリスは笑いを見せた。ラスタルは怪訝に眉根を寄せた。

「何がおかしい?」

「お前が卑怯な奴で良かったと思っただのだ。おかげで心置きなくこちらでもバエルの真の力を使うことが出来る」

「はったりだな。そんな物があるならもっと早く使っていたはずだ。火星に逃げる必要も無かったはずだ」

「そうだな。私もまさか使う機会が来るとは思っていなかった。もっと早くにこの状況になっていればな。では、教えてやろうか! バエルはMAを操ることが出来るのだ!」

「は?」

「MAをつ!! 操ることが出来るのだあああああ!!」

「何だとおおおお!!」

さすがのラスタルも驚きを隠せなかった。びつくりして目を見開く彼を、マクギリスは勝利者の流し目で見送った。

バエルは戦場を駆ける。宇宙空間の闇を貫く千のビームを次々と避け、千の天使から射出されるブルーマの大軍を神速の剣技で切り伏せて、数多の爆発の炎を背にハシユマルの大軍の中に突っ込んでいく。

「愚かな。八つ裂きにしろ!!」

ラスタルが命令するまでもなく、MAはすでに動いている。ガンダムを敵と定め次々と振るわれる腕とワイヤーブレードをバエルはたった二本の剣で全て弾き返し戦場を駆け巡る。

「忘れたのか? このバエルがかつての厄災戦を終わらせた機体であることを!」

アグニカに出来たことがマクギリスに出来ないわけもない。そこにあるのはかつての伝説の再現以上のことだ。次々と繰り出されるビームをバエルは次々と避けていく。もう何機目かも分からないブルーマを斬り捨てる。

もしMAに感情があったのなら感じるのは恐怖だろうか怒りだろうか。今となつてはいつでもいいことだ。

戦場を一通り駆け巡ったバエルは満足したかのように1000機のハシユマルの集まる中心で静止した。それは諦めたからでは無い。準備が終了したからだ。

バエルは1000機のハシユマルの全てをロックオンしていた。これから始まるのは王者の裁きだ。マクギリスは吠える。

「見せてやろう！ バエルの力の真髄を！ バエルの威光の前に従うがいい！ MA操りこうせええええん!!」

バエルから発射される怪光線が1000機のハシユマル軍団を照らし出す。ハシユマルは全てバエルの支配下に入った。

言葉を失うラスタルに掛ける慈悲など無い。

「さあ、今こそ逆賊ラスタルを討つのだあああ！」

バエルの号令の元、ハシユマル軍団がアリアンロッド艦隊に襲い掛かる。悪夢のようなその光景にアリアンロッド艦隊は大混乱に陥つた。

白い天使達と黒いプルーマの群れが次々と船を撃破していく。

その景色をオルガと三日月は遠くから見つめていた。

「オルガ、俺はどうしたらいい？」

「俺達の目的は一つだ。生き残ることだ！」

「了解」

崩れゆくアリアンロッド艦隊の戦線をもう誰も維持することなど出来なかった。

旗艦にも直撃を食らい、爆発の炎が吹き上がる船からラスタルは脱出することを決めた。

「おのれ、マクギリスめ！ この場の勝利はお前にくれてやろう！ だが、ここだけだ！ 地球に帰ってお前を貶める悪い話があること無いこと吹聴してやる！ お前の望む未来など来させはしないぞ！」

だが、彼は脱出することは出来なかった。その前に立ちはだかる者がいたのだ。ガエリオだ。

「ガエリオ、何をしている！ 早くマクギリスを倒しにいかないかあ

ああ!!」

柄にもなく怒鳴り散らすラスタルをガエリオは静かな視線で見つめ返す。その瞳は静かだが確かな炎が宿っている。

「リアンロットは正義の艦隊です。私は正義を守る騎士としてあなたを逃がすわけにはいかない!」

ガエリオは銃を構える。

「お前もヒットマンかああああ!!」

ラスタルも銃を抜こうとするが、ガエリオが引き金を弾く方が早かった。ラスタルの体は撃ち抜かれ、吹き上がる炎の中へと消えていった。

ガエリオは銃をホルスターに収め、宇宙を見上げた。

「マクギリス、決着はまた今度付けるとしよう」

戦いの終わっていく戦場を一瞥し、ガエリオはすぐにその場を後にした。

宇宙に太陽のような赤い炎が燃える。

マクギリスは禁忌の力を後世に残すことを選ばなかった。戦いが終わって1000機のハシユマルは次々と自爆していく。

マクギリスは眩しく宇宙を見つめた。

「これから改革が始まる。このバエルの元で!」

黄金の剣を振り上げる。光が照らし出すその威風堂々とした白いMSの姿はかつての伝説が再び始まることを予感させた。

こうして歴史にその真実を知られることはなかった一つの事件は収束した。